

Bleak House における Bucket 警部の情報収集

福島 光 義

外国語第2研究室

Inspector Bucket's Way of Gathering Information in *Bleak House*

Mitsuyoshi Fukushima

English

Abstract

In the nineteenth century an increasing scepticism in the possibility of understanding society takes place and as a result a split between knowable relationships and an unknowable society comes about. Charles Dickens articulates his responses to the crisis of the knowable community in one of his later novels, *Bleak House* (1852-53). Dickens represents the collective power and knowledge of the London police force and articulates a new form of knowledge of society in the character of Inspector Bucket. Bucket is gifted with a most remarkable forefinger and it is described grotesquely.

This paper is an analysis of Dickens' attempt to reform current society, which he symbolizes in the structures of a social body represented by the fat forefinger of the main character Inspector Bucket. An examination of the processes of Bucket's unique approach to gathering information in his quests is provided to support Dickens' accurate view of present society. Finally, an analysis of Bucket's kindness and sympathy towards the characters both in his public and private life is discussed to demonstrate Dickens' desire for a more humane society.

要 旨

19世紀に、社会を理解する事の可能性への懐疑や不信が増大し、結果として、知る事の出来る関係と、知る事の出来ない社会との間に亀裂が生じている。Charles Dickens は彼の後期の小説の一つ

Bleak House (1852-53) において、共同社会認識の危機に対して重要な反応を示している。Dickens はロンドンの警察力の集約的な力と情報を描き、Bucket という人物を通じて社会についての新しい形の認識を表明している。Bucket は特別に注目を引く人差指を与えられており、それはグロテスクな描かれ方をしている。本論文は、Bucket の人差指によって代弁される社会共同体の構造を分析し、又捜査中における Bucket の独特の情報収集方法を探り、最後に、公私両面における Bucket の他の人達への親切な態度や人間味について分析している。

I

Charles Dickens (1812-70) の *Bleak House* (1852-53) における Bucket という Inspector (警部) の登場の仕方は一風変わっている。“Don't mind this gentleman,”とか、“This is only Mr. Bucket.” (22)とか、Tulkinghorn という弁護士からさりげなく紹介されているのが首都警察の刑事部門所属の Bucket 警部である。彼は、第22章で、その場に居合わせた法律文房具商 Snagsby なる御仁を、存在していることの気配を感じさせないで現場に出現し、大いに面喰わせて初登場する。作者は、続けて、彼の体付き、鋭い目付き、比較的目立たない身なり、年齢などを、簡潔に説明している。

Mr. Snagsby is dismayed to see, standing with an attentive face between himself and the lawyer at a little distance from the table, a person with a hat and stick in his hand who was not there when he himself came in and has not since entered by the door or by either of the windows. There is a press in the room, but its hinges have not creaked, nor has a step been audible upon the floor. Yet this third person stands there with his attentive face, and his hat and stick in his hands, and his hands behind him, a composed and quiet listener. He is a stoutly built, steady-looking, sharp-eyed man in black, of about the middle-age. Except that he looks at Mr. Snagsby as if he were going to take his portrait, there is nothing remarkable about him at first sight but his ghostly manner of appearing. (22)

Bucket 警部は、ヒロイン Esther Summerson、John Jarndyce、Ada Clare、Richard Carstone、Sir Leicester Dedlock、Lady Honoria Dedlock、それに Tulkinghorn などと比較すると、重要な登場人物とは言い難いが、本作品においては、構造、テーマ、プロットの点で、必要不可欠な人物で、仕事面では、腕利きで、様々な人物と接点及び交流があり、時折親切で愉快的な面を見せ、人間味溢れる魅力ある人物である。いささか人間性に問題があるので引用するのに躊躇するが、弁舌の才能は優れていると思われる作中人物の一人 Harold Skimpole (Dickens の知り合いの作家 Leigh Hunt (1784-1859) をモデルにした実務や金銭に無頓着を装い、実際は人のよい友人に寄生して生活している) が、彼が敏腕な刑事であることとお金に価値を置いていることを語っている。

Skimpole reasons with himself, this is a tamed lynx, an active police-officer, an intelligent man, a person of a peculiarly directed energy and great subtlety both of conception and execution, who discovers our friends and enemies for us when they run away, recovers our property for us when we are robbed, avenges us comfortably when we are murdered. This active police-officer and intelligent man has acquired, in the exercise of his art, a strong faith in money; he finds it very useful to him, and he makes it very useful to society. (61)

勿論、後述する追跡劇の時にわかるが、Esther の口からも、彼の有能さと人情味があることは証明されるし、Sir Leicester Dedlock から絶大な信頼を寄せられてることからも、彼が優秀な警部であることは充分察しがつく。実務や生活能力に欠けた Skimpole とは対極にいるのが、Bucket 警部で、社会の秩序を確立しようとしており、家庭内の秩序を重んじている Esther と類似した面がある。Bucket は捜査上、情報を得るためには、自分に都合のよい理屈をこね、金には無頓着だとうそぶく欺瞞的な Skimpole の本性を見抜いていて、彼に金を渡す、つまり彼を買収することすらいとわない。この小説の魅力の一つは、例えば、この Bucket と Skimpole の対比に見られるように、対照的な人物の配置とそれぞれの側から互いに人物評をさせている点にある。

Dickens の大半の登場人物に実在のモデルがいたように、この Bucket にも実在のモデルがいたようだ。⁽¹⁾ Dickens は1850年7月13日発行の *Household Words* (以下 *HW*) の ‘The Modern Science of Thief-taking’ という読み物の中で、刑事部門の組織力と仕事振りを説明し、又、同年7月27日発行の *HW* の ‘A Detective Police Party’ という読み物の中で、Wield 警部や他の警部との会見記を詳述し、刑事警察の巧妙さや忍耐強さなどについて報告している。この Wield 警部のモデルが1829年創設の首都警察の Field という警部であるとされている。しかし Dickens 自身は、1853年9月17日付け発行の *The Times* でこの事を否定している。これは、いかに実在世界を realistic に描くのが信条とは言え、虚構世界を構築する小説家の発言としては無理からぬことであろう。とはいえ、Dickens が「Bucket を Field として見ており、彼に Field の特異ではあるが、しかも限られた賢明さ、彼の活力、性質の良さ、彼独特の癖、とりわけ悪の出没する所についての詳しい知識を付与している」⁽²⁾ ことは明らかである。

ついでながら、Ray Dubberke が ‘Dickens’s Favourite Detective’⁽³⁾ で、Dickens が ‘the great Detective’ とも呼んでいる ‘Detective W...’ とは、Field でも同じく Whicher という警部でもなく、実は、1869年5月にスコットランド・ヤードの刑事部門の38才の主任警部であった Adolphus Frederick Williamson という人物であったと主張している。Williamson は身なり振るまいともに紳士らしく、Gardening が趣味であったという。ただ、*Bleak House* 出版当時1852-53年頃は、John Butt & Kathleen Tillotson が指摘している通り、Bucket には Field の影が濃厚であるのは否定できない。特に、二人とも共通して太い人差指をもっている。前述した7月27日発行の *HW* の記述の中で、Wield 警部 (実は Field) は、ずんぐりした人差指 (a corpulent fore-finger) の助けを借りて、彼の会話を

強調する癖があるとされている。一方、虚構の中の Bucket 警部のずんぐりした人差指の動きたるやより一段と大袈裟に誇張されて自由自在である。Bucket と人差指はいつも相談しており、それは、時には耳に当てると情報をささやいてくれ、罪人の前で振られると、相手を破滅に追い込むことすらできる。

Bucket は、小説史上初の本格的刑事探偵の登場ということになっている。Bucket をまねたかどうか定かではないが、ポアロ、刑事コロンボそれに古畑任三郎など、人差指、複数の指、又は手などを顔や額の一部に当てて考え事をしたり、犯人を追い詰める時に指差したりする探偵がたくさん登場する。ただし、Bucket の場合、ただ単なる指の癖に止まっていないところが、他の探偵とは異なる。

Bucket の人差指は、口、耳、及び鼻とか、外界と接触しコミュニケーションを図っている他の諸器官を統括しているグロテスクな身体の一部である。David Storor⁽⁴⁾ は、Bucket の人差指と彼の偏在 (omnipresence) を結び付けて記述することは、Mikhail Bakhtin の言うグロテスクな身体とその表現の理論化と言う観点から、非常に興味深いと指摘し、更に Bakhtin にとって重要なのはグロテスクな身体はただ単に個人の身体ではなく、集合的な社会共同体の表れであると述べ、Bucket と関連付けて、グロテスクなものの集合的性質に焦点を当て、彼のずんぐり肥えた人差指と情報を提供してくれる口、耳、及び鼻とか、外界と接触しコミュニケーションを図っている器官によって表される社会共同体の構造を探っている。

時代が変われば社会も変わる。小説家というものは、それぞれの作品において、社会とはいかなるものか、登場人物や人物間の関係を通じて明示するものである。つまり、それぞれの作家なりに、共同体とか社会とはいかなるものか理解できる形で提示するのが普通である。しかし、19世紀社会、特にイギリス社会は、作家達が果たして理解しうる形で読者に提供することを許容したであろうか。Raymond Williams⁽⁵⁾ は、19世紀の間に社会を理解する事の可能性への懐疑や不信が増大し、結果として、知る事の出来る関係と、未知の、知る事の出来ない、圧倒する社会との間に亀裂が生じていると指摘している。更に、Williams は “crisis of the knowable community” に対して、最も早く重要な反応を示しているのが Dickens であるとしている。

こういった「危機」に対して、Bucket 警部と彼の人差指はいかなる対処ができるというのであろうか。彼は、準男爵 Sir Leicester Dedlock との会見で、「ちょっとした情報」 (a piece of information) くらいは聞き漏らそうが漏らすまいがたいしたことはない、自信の程を語る。

I know so much about so many characters, high and low, that a piece of information more or less don't signify a straw. I don't suppose there's a move on the board that would surprise ME, and as to this or that move having taken place, why my knowing it is no odds at all, any possible move whatever (provided it's in a wrong direction) being a probable move according to my experience. (54)

彼は、身分の高い低いに関わりなく多くの人々について、様々な情報を掌握できる。これは、勿論、彼個人の単独の力だけではなく、むしろ首都警察の刑事部門の誇る組織力に支えられているせいである。例えば、彼は、Sir Leicester Dedlock の妻 Lady Dedlock 捜索の間、部下をパトロールさせ、情報を得させ、見張りをさせ、又再びロンドンに入って来るに際し、部下に彼女の居場所の方へと自分を案内するよう頼んでいる。

Storor⁽⁶⁾ が示唆する様に、作者が Bucket という偏在し広い経験を持つ人物の中に表しているのは、ロンドンの警察力の集合的な力と情報であり、Bucket のグロテスクに具現化された視覚、聴覚、そして嗅覚に対する能力は、首都警察の情報収集力を代弁的に表現しており、作者は Bucket という人物に社会についての新しい形の認識を表明している。大都市における人々は己の位置や互いの関係、つまり社会と自分との関係性を的確に把握しえないでいるが、Bucket という警察組織を通じて、都市との繋がりを何とか見出すのである。

確かに、Bucket には、上述したようなロンドンの警察組織の代弁者という重要な側面があるが、本稿では、それだけでなく、Bucket の職務遂行時、特に息詰まる時間との争いの中で、逃走した Lady Dedlock を Esther を連れて追跡する時の情報収集の仕方を探り、公務遂行中でありながら時折見せる暖かく親切な態度や人間味にも言及して行く予定である。また、組織の代弁者としての Bucket は、果たして本当に19世紀イギリス社会を理解し得ているのかどうか、をも論じたい。

II

Bleak House の本筋は、大法院における Jarndyce vs. Jarndyce 事件の裁判をもって始まる。この裁判は、結審するまでに徒に長い年月がかかり、この裁判に関わって遺産相続の夢を見る、幾多の人々、特に若い人々の人生を狂わせる。裁判が終わった時には、彼らは仮に相続できても、結局は訴訟費用に全てが消えてしまっている。又、Dedlock 家の奥方の過去の秘密を巡って、脅迫したり一儲けしようとして企んだりする、弁護士や法律に従事する人々を含む、上流、中流、それに下層階級に至る様々な人々が関与する。Lady Dedlock の秘密はヒロイン Esther 自身が大いに関係があるが、裁判の当事者でもある John Jarndyce は、*Bleak House* の持ち主で、叔母に育てられたが彼女の死後 Esther を引き取り、保護者となる。Esther は、Jarndyce の家 *Bleak House* の家政を任される。

Norman Page が、「*Bleak House* の後では、小説は変わらず同じままではいられなくなった」⁽⁷⁾ と述べているが、理由はいろいろあると思われるが、その一つに二人の、即ち Esther と全知 (omniscient) の語り手の存在が挙げられよう。Esther は一人称過去形で、彼女の経験するより個人的直接的な狭い世界を語り、全知の語り手は三人称現在形で、写実とロマンスと風刺と象徴と寓意とをない混ぜ、複雑な人間関係と錯綜とした detective plot を含むプロットとを巧妙に絡ませながら、個人、家庭及び社会の秩序と混沌、高貴と低俗、狂気と平穏などを描写しながら、劇的な緊張感を醸しつつ物語る。最終的に二人の語り手を統轄している作者は、両者の語り手が Lady Dedlock 逃走追跡というこ

の小説の最高の劇的緊張の中で、自然に、連続してつながるように仕組んでいる。

この小説は全部で67章あり、Esther の語りは33章、残りは全知 (omniscient) の語り手によるもので、導入部の1、2章は全知によって、次の3章から6章まではEstherによって語られる、という風に適当な間隔で交互に語られる。さて、本論の主役 Bucket 警部は全知の語り手により22章ではじめて登場して以来、24、25、46、47、49、53、54、56、57、59、61、62の各章に登場し、そのうちEstherの語りにより24、57、59、61、62の各章に登場する。これ以外にも、名前だけ言及されているのが55、63章。又、後の57章で Bucket 本人から明かされることになるが、Esther がまだ Bucket と知らずに言及している31章にも目立たないが登場している。58章では実際には登場していないまでも、Lady Dedlock の行方を心配し、警部の報告を今か今かと待ちわびている病床の Sir Leicester Dedlock の背後で必死になって追跡する姿がまざまざと伝わってくる。登場する回数が多いだけで重要とは言えないが、Bucket はやはり、この小説の中で、重要な役割を担っていると言えよう。先ず、彼は Lady Dedlock の秘密・失踪を detective plot において、人と人を繋ぐ接点となっており、事件解決のためには、階級の差を越え、どんな場所にも出向き、どんな階級の人にも会う。彼はこの物語の最も緊迫した場面、「追跡」(Pursuit) と題した56章から Lady が見つかるまでの切迫した場面で大活躍し、Esther の語りと全知の語りの両方に登場し、二つの語りを結び付ける。

捜査のためには Bucket はどんなところへでも出向いていくのであるが、そのうちの一つに Tom-All-Alone's というスラム街がある。Tom-All-Alone's は疫病が蔓延する極めて不潔な地区であるが、実際ロンドンにはこのような地区が存在したようだ。1849年7月5日付けの *The Times* の “A Sanitary Remonstrance” と題した投書でも、その実情が訴えられ、ロンドンの中流階級に属する人々の注意を引いた St. Giles のスラム街が、Tom-All-Alone's のモデルになっている。Dickens が、こういった地区の衛生状態とそこに住む浮浪児などにいかに強い関心を抱いていたか、作家としてそれらを言わねばならないことであると考えていたかは、この小説の題名の候補に Tom-All-Alone's を挙げていることから、充分察する事が出来る。また Dickens 自身、Field 警部に同行し、St. Giles あたりを訪れ、公衆衛生の改善を強く説いている。⁽⁸⁾ 公衆衛生問題に関しては、公的機関の専門家も看過していた訳ではなく、1849-52年に公衆衛生状態についての一連の報告が為され、1852年には the medical superintending inspector of the Board of Health の Dr. John Sutherland が *Reports on the Metropolis with Special Reference to the Threatened Visitation of Epidemic Cholera* を発行し、病気と住宅問題とを関係付けている。⁽⁹⁾

19世紀イギリスでは、コレラ、しょう紅熱、ジフテリア、チフスなど伝染病が時々発生した。他の病気もそうであるが、チフスは階級や地位に関係なく伝染し、1861年にプリンスの婚約者がこの病気 でなくなった。⁽¹⁰⁾ *Bleak House* においても、不潔で衛生状態の悪い地区 Tom-All-Alone's に住む浮浪児で十字路清掃人(主として馬糞) Jo から、Esther の小間使い Charley へ、彼女から Esther 自身へという順に、それぞれが、天然痘に感染している。混雑、不潔、病気それに伝染病は当時の「首都の埋葬所」にも及んでいる。Esther の父親とされる Nemo(作中人物 Tulkinghorn がラテン語で no one

の意味であるとしているが、*OED* では特に語源はない、ようである。) が埋葬されている場所で、その状況は死体が狭い墓所に詰めこまれ山積みされており、そこから発する悪臭たるや耐え難いものであった、ようだ。⁽¹¹⁾ 従って、Jo がヴェールを纏った謎の女性 (実は Lady Dedlock) をその埋葬所に案内して、次のように語っているのは事実のようである。(Jo の訛りは原文のまま。)

“There!” says Jo, pointing. “Over yinder. Among them piles of bones, and close to that there kitchin winder! They put him wery nigh the top. They was obliged to stamp upon it to git it in. I could unkniver it for you with my broom if the gate was open. That’s why they locks it, I s’pose,” giving it a shake. “It’s always locked. Look at the rat!” cries Jo, excited. “Hi! Look! There he goes! Ho! Into the ground!” (16)

III

伝染病は身分の上下を問わず、病気と死と破滅をもたらすものであるが、Bucket 警部も上は Sir Leicester Dedlock から下はスラム街の Tom-All-Along’s まで、やはり自由に出入りするが、それは破滅や混沌をもたらすためではなく、道徳的社会的秩序を護り、維持するためである。Dickens は警部を劇的でロマンティックなものと同じように、自力で成功した人、秘密を扱う人、謎を解く人である、この新しい職業の注目すべき一員に対し尊敬と仲間意識⁽¹²⁾ とをもっている。Detective という職業の Bucket は、どこにでも出没し、小説に対する作家の立場に似て omnipresent な存在である。

Bucket の警部としての仕事は、弁護士 Tulkinghorn 殺害の容疑 (後で真犯人でないことがわかる) で、友人の George Rouncewell を拘束した事、Tulkinghorn 殺害の真犯人 Hortense 嬢を見事に逮捕したこと、そして最後に逃走した Lady Dedlock を追跡し、彼自身の警部としての経験からくる勘と彼の属す警察組織の情報網を頼りに、彼女の行き着く先を突き止めて発見したことが主として挙げられよう。

49章で George を拘束した時、Bucket が職務と友情とを峻別している事が見事に描かれている。彼は、友人の元砲兵隊員でバスーン奏者の Bagnet の妻の誕生日を祝いに行き、ウィットとユーモアに富む会話をし、おまけに歌まで上手に歌い、夫婦や子供達にすっかり気に入られ、まさに好人物の一面を見せると同時に、やはりお祝いにきていた George に逃げられないように、Bagnet の妻に裏庭に出口があるかどうか、抜け目なく確認している。愉快で陽気な友人としての振舞いの後、帰りがけに次のように言って友人を拘束する。

“Now, George,” says Mr. Bucket, “duty is duty, and friendship is friendship. I never want the two to clash if I can help it. I have endeavoured to make things pleasant to-night,

and I put it to you whether I have done it or not. You must consider yourself in custody, George.”

“Custody? What for?” returns the trooper, thunderstruck.

“Now, George,” says Mr. Bucket, urging a sensible view of the case upon him with his fat forefinger, “duty, as you know very well, is one thing, and conversation is another. It’s my duty to inform you that any observations you may make will be liable to be used against you. Therefore, George, be careful what you say. You don’t happen to have heard of a murder?” (49)

“Murder!”

友人同士で、片方が警官、片方が犯人、という関係で逮捕しなければならないという運命のいたづらを描いたアメリカの短編小説家 O. Henry (1862-1910) の ‘After Twenty Years’ という優れた短編があるが、すでに Dickens はこの関係を使っていることになる。しかし、Elizabeth Dale Samet が「警察の偏在性と全知であることに関する不安が *Bleak House* という同時代のフィクションの中に溢れている」⁽¹³⁾ と指摘している通り、Dickens は早くも警察の密偵行為が人々に与える不安を表している。確かに Bucket には罪もない人たち、例えば、Snagsby、George、それに Jo とか無力な善人たちを徒に悩ませている側面がある。

IV

弁護士 Tulkinghorn 殺害の嫌疑は、過去の秘密を抱えている Lady Dedlock にも及んでくる。Bucket 警部は、Jo を大いに混乱させた Lady と Hortense の衣装取替えの裏を見抜き、つまり Lady がフランス人で侍女の Hortense の衣装を借りて、過去の恋人の墓へ行っただということ、Jo などから情報を得て、気性の荒い Hortense が真犯人である事を突き止める。この犯人にも Mrs. Manning という実在のモデルがおり、Dickens も利用したようだ。⁽¹⁴⁾ Tulkinghorn と同じように、Mrs. Manning も銃で相手を射殺した。この事件は夫の Mr. Manning も絡んでおり、夫婦ともども逮捕され、1849年11月13日約3万人の群衆の面前で絞首刑により公開処刑された。Dickens は *The Times* に野蛮な公開処刑に抗議する手紙を二度ほど送っている。彼は処刑は牢獄の中で行われるべきであると主張しているのであって、死刑制度そのものに反対してはなかったようだ。当時、夫婦一緒に処刑は150年間で初めてというのでセンセーショナルな話題を呼んだ。Mrs. Manning はベルギー人で大胆不敵な激情の持ち主で、裁判中は激しく叫んで妨害するし、収監中は、看守という看守を激しく罵ったり、大胆にも自殺を図ってみたりした。Hortense は Mrs. Manning の気性や妙な英語を共有しているといわれる。大衆同様、作家 Dickens の想像力を捉えたことは充分ありうることである。

53章の冒頭では、人差指の忙しい時と暇な時が対比され、同時に持ち主である Bucket の緊迫した時

と平穏な時とが次の様に描写される。些か長いが引用してみよう。

Mr. Bucket and his fat forefinger are much in consultation together under existing circumstances. When Mr. Bucket has a matter of this pressing interest under his consideration, the fat forefinger seems to rise, to the dignity of a familiar demon. He puts it to his ears, and it whispers information ; he puts it to his lips, and it enjoins him to secrecy ; he rubs it over his nose, and it sharpens his scent ; he shakes it before a guilty man, and it charms him to his destruction. The Augurs of the Detective Temple invariably predict that when Mr. Bucket and that finger are in much conference, a terrible avenger will be heard of before long.

Otherwise mildly studious in his observation of human nature, on the whole a benignant philosopher not disposed to be severe upon the follies of mankind, Mr. Bucket pervades a vast number of houses and strolls about an infinity of streets, to outward appearance rather languishing for want of an object. He is in the friendliest condition towards his species and will drink with most of them. He is free with his money, affable in his manners, innocent in his conversation — but through the placid stream of his life there glides an under-current of forefinger. (53)

特に事件のない平穏な時は、多くの家の内側を知り、無数の街路を歩き回り、同僚に対してはきさくに一杯やるのを辞さない。しかし、平穏な生活の流れの下には、いつも人差指が潜んでおり、警察組織を代表するこの人差指は、いざ Hortense 逮捕というときに忙しく活躍するという訳である。

Bucket は犯人逮捕のためには手段を選ばず、自分の妻さえ利用する。Mrs. Bucket は、内助の功というのか、Hortense を目立たぬように尾行し夫の証拠集めに進んで協力する。彼女は密偵の素質があるようだ。Bucket は相手を罠にかけたり、事を仕損じない様に急がず、動かぬ証拠を突きつけ、外堀も内堀も埋めてから逮捕する。事件の謎は54章で明かされる。Bucket の口から、Lady の秘密、即ち、彼女の過去に Captain Hawdon (Nemo) という恋人とその恋人との間に生まれた子供 (Esther) のこと、Tulkinghorn 殺害事件の真相などが、Sir Leicester Dedlock に語られる。この一部始終を聞く Leicester は情け容赦のない人差指を見つめている。

Sir Leicester sits like a statue, gazing at the cruel finger that is probing the life-blood of his heart. (54)

この後、Leicester はあまりのショックと心労とで脳卒中で倒れてしまう。全てがわかってしまったと悟った Lady は置手紙をして、姿を消す。56章で、Leicester から彼女の捜索を依頼されてからの

Bucket の行動は素早く確かである。一分一秒たりとも無駄に出来ないと言って、病気で口のよくきけない Leicester の気持ちを察し、金を入用なだけ預かり、なにか手がかりとなるものはないかと勝手に Lady の部屋のテーブルの引出しといわず、宝石箱といわず、あちこち探し回り、甲斐あって有力な手がかりとなる Esther Summerson と名前の入った白いハンカチを手に入れ、急いではいるが数分かけて部屋の一切の品物をきちんと元通りにすると、危険なぐらいのスピードで George のところへ行き、Esther の居場所を教わると、これから寝ようとしている Jarndyce を訪れ、素早く用件を伝え、もう寝入っていた Esther を連れ出す。Bucket はこの時 Jarndyce に、ある人の命がかかっており、一刻の猶予もない事を伝える。彼は、時間が経てば経つほど、一時間が100ポンドにも1000ポンドにもなると言って、時間を金に換算して相手を説得している。

追跡を開始した56章は全知の語り手によって語られ、続く57章は Esther によって語られるというように、語り手が Esther へとバトン・タッチされている。Detective plot の主役 Bucket がストーリーを巧みに自然に無理なく繋ぐ役目を果たしており、追跡も Lady の血のつながった Esther の口から、警部の捜索の様子が、Esther の胸を締め付けられる心の痛みと共に、直接的に切実に持続的な緊張感をもって語られる。警部は夜中に突然起こされ不安の只中にいる Esther を安心させるように細心の注意を払う。こういう心配りをして顔を擦っている時の彼の人差し指は彼女を安心させる。

He was really very kind and gentle, and as he stood before the fire warming his boots and rubbing his face with his forefinger, I felt a confidence in his sagacity which reassured me. It was not yet a quarter to two when I heard horses' feet and wheels outside. "Now, Miss Summerson," said he, "we are off, if you please!" (57)

そして、Bucket は、雪の中を、物凄いスピードで、Esther がどこにいるかわからなくなるほど、複雑に入り組んだ街中を走り、テムズ川を二度も渡り、錯綜とした狭苦しい道路、ドック、船溜り、大きな倉庫、撥ね上げ橋などの続いているあたりを通りぬけ、道々部下と言葉を交わし、Lady の行き先の手がかりになる情報を得る。途中の宿場では、馬を取り替え、漸く最初の手がかりになる煉瓦作り職人の家を探り当て、何とか苦勞してその家人から手がかりを聞き出すと彼女の向かった方向を追うが、有能な警部としては思わず不覚を取り、足取りを見失ってしまう。しかし、彼は、すぐ自分の誤りに気付き、Esther は事態が全く把握出来ないまま、今度は馬を4頭立てにして、全く正反対の方向へ逆戻りし、煉瓦作り職人の妻の Jenny という人物を追う。つまり、そんな窮地に立たされても、彼は冷静沈着、落胆したり過度に悔しがったりはせず、すぐさま、宿場ごとに4頭馬の準備を手配するよう部下に指示している。

続く全知による語り手による58章で、一気に逃走追跡の話しを続けるのかと思うと、場面は一転病床上で Lady の消息と安否を今や遅しと待っている Leicester の描写へと移っている。作者は読者を一時じらしているようにも思われるが、捜索は中断している訳ではなく、Dedlock 家の場面の背後で間

断なく続行されている。本章では、気の毒な Leicester 卿と Lady の秘密と失踪とが、ロンドンの社交界周辺で密かにゴシップの中心となっており、時と場所を隔てて距離を置いて描かれている。

読者はじらされたが、59章で、いよいよ Bucket 警部と Esther の追跡劇も大詰めとなる。時刻は既に午前3時になっており、曇りの中をロンドンへ向かう。警部はびしょぬれになった Esther を乾いたわらで暖かくしてやったり、不安を募らせる彼女を懸命に励ます。疲労と不安も更に強まっていく丁度朝5時30分に、Esther は将来結婚することになる医師の Allan Woodcourt に会う。Esther は、彼にも慰められ励まされて、昔の恋人の眠っている埋葬所の門のところで、冷たくなっている Lady Dedlock、つまり自分の母を発見する。

Allan Woodcourt は不思議とここぞという時に登場しており、Jo を診察し最後を見取ってやったり、46章では、夫の暴力によるものと思われる怪我をしているある女の傷の手当てをしてあげ、その際、その女の夫が煉瓦職人であることを、女の持ち物や着物に付着している粘土の色から、見事言い当て、Bucket 顔負けの推理力を見せる。この医師という職業も、警部と同じく、Dickens が信頼と期待を寄せていた職業である。ここで思い出すのが、名探偵 Sherlock Holmes と医師 Watson のコンビである。その後、シリーズ化して、Bucket 警部と医師 Allan Woodcourt の組合せで推理小説でも書こうという気には Dickens はならなかったようだ。Dickens は同じパターンを殆ど繰り返さない。しかし、最後の未完の作品 *The Mystery of Edwin Drood* (1870) は本格的な推理小説であり、後世の推理小説ブームを予感させる。

Bucket 警部から、追っ手の行方を攪乱するために、Lady と Jenny とがそれぞれの衣装を取り替え、彼らは Lady の衣装をまとった Jenny の方を追跡してしまたことが明かされる。取り替えについては、警部自身が22章で Jo がかって Hortense の服装をした Lady と Hortense とに混乱させられたことを承知していたので、自分もまんまと欺かれてしまったことになる。Jenny を追ったが、その足跡は途中で消えてしまった。つまり Jenny は、足跡を消した後、家に帰ってしまったのである。生きた Lady を保護できなかったのは、警部の責任なのであろうか。Elizabeth Dale Samet が指摘しているように、「Bucket の監視と搜索の卓越した力は、まさに彼が何かがなされるのを防ぐ機会をついに与えられる時に、彼を見捨ててしまっている」⁽¹⁵⁾ のであろうか。「何かがなされるのを防ぐ機会」とは、Lady を死なせずにすむ機会、ということである。確かに、警部はその機会を得られなかったが、これは、警部と警察組織の限界なのではなかろうか。いかに優秀な人材と組織力があるとはいえ、不可抗力のこともあると考えられる。

些か細かい点になるが、57章で、警部と Esther が、ある煉瓦職人の家に立ち寄り、Esther の母とおぼしき人が立ち寄ったことを何とか聞き出したが、Jenny と夫の煉瓦職人とは別に、ことの真相を知っている夫婦が別において、余計なことをしゃべると只ではおかぬという暴力的な夫の威嚇があり、警部としてもその妻にどんな危害が及ぶかわからないので、相手の家庭事情に対する配慮からそれ以上追求することは止めている。更に、彼は、間違った方向を追っていたことに気付いた後、遅れを取り戻すべく全速力でロンドンへ向かっている。Esther はなかなか母の行方がつかめず、不安と疲労のさな

かでも、又母の死後も、警部の間違いをまったく批判していない。警部自らが落胆して追跡を更に遅らせることなく、まさに窮地のさなかで Esther を励まし、自らを鼓舞して次の行動に移っている。彼が唯一残念がるのは時間が足りない、ということである。

Bucket 警部の情報収集の特徴は、適切に配置された部下から情報を得、部下に適切な指示を与え、警察の組織力を充分活用し、必要な時には生きた金の使い方をすると同時に、捜査時には人間味を失わないよう配慮し、直接的に自分の目と耳など感覚器官を駆使して得る、といったものである。Bucket 警部は、この小説の detective plot の中では充分その存在意義があり、社会的にもその責務を果たしているといえよう。

Esther が Bleak House の housekeeper としての役割を文字通り果たしているのと同じように、公人としての自分と私人としての自分を峻別している Bucket 警部も比喩的にはあるが、「社会というより大きな家」(the larger household of society)⁽¹⁶⁾ を護る役割を果たしている。Bucket は、上流階級も含め、主として中流階級の道徳的社会的秩序を構築し維持すること、まさに混乱した社会的秩序を再構築する課題を負わされている。作者 Dickens は *Bleak House* という作品で、Bucket 警部を通じて治安面から、医師 Allan Woodcourt を通じて公衆衛生面から、つまり警部と医師という新しい職業人を通じて、新しい社会認識の形態を提示しようとしているのではなかろうか。

ずんぐりした Bucket の人差指はただ単に彼個人の身体の一部ではなく、集合的な社会共同体を代弁するものである。グロテスクに表現された彼の人差指から社会が見える。モデルとなった実在の警部が誰であれ、又いかに似ていようとも、実在の人物と異なり、虚構の Bucket 警部は作品とともに永久に生き残るであろう。

注

使用テキストは、Charles Dickens, *Bleak House in The Oxford Illustrated Dickens* (London: Oxford UP, 1948). 尚、本文中の *Bleak House* からの引用文の末尾に付された括弧内の数字は章数を表す。

- (1) See John Butt & Kathleen Tillotson, *Dickens at Work* (London: Methen & Co. Ltd, 1957), pp. 196-198.
- (2) John Butt & Kathleen Tillotson, *ibid.*, p. 198
- (3) See Ray Dubberke, 'Dickens's Favourite Detective', *The Dickensian* 94 (1998) pp. 45-48.
- (4) See David Storer, 'Grotesque Storytelling: Dickens's Articulation of the "Crisis of the Knowable Community" in *Bleak House* and *Little Dorrit*', *The Dickensian* 94 (1998) pp. 27-28.
- (5) See David Storer, *ibid.*, p. 25. ここでは、Storer による Raymond Williams の引用を借用している。
- (6) See David Storer, *ibid.*, p. 28.
- (7) Norman Page, *Bleak House: A Novel of Connections* (Boston: Twayne Publishers, 1990), p. 17.
- (8) See John Butt & Kathleen Tillotson, *Dickens at Work* pp. 33-34.
- (9) See Norman Page, *Bleak House: A Novel of Connections* pp.34-35.
- (10) See Norman Page, *ibid.*, p.35.
- (11) See Norman Page, *ibid.*, p.36.

- (12) See Norman Page, *ibid.*, p.39.
- (13) Elizabeth Dale Samet, “When Constabulary Duty’s To Be Done” : Dickens and the Metropolitan’, *Dickens Studies Annual*, ed. Michael Timko et al (New York : AMS P, 1991), pp. 27-28.
- (14) See Norman Page, *Bleak House : A Novel of Connections* pp. 40-41.
- (15) Elizabeth Dale Samet, “When Constabulary Duty’s To Be Done” : Dickens and the Metropolitan’, p. 140.
- (16) David Storer, ‘Grotesque Storytelling : Dickens’s Articulation of the “Crisis of the Knowable Community” in *Bleak House* and *Little Dorrit*’, p. 31.